

マイフェイバリット ライフ in 美幌町



ぼちぼち農場 荒木千夏

(あらき ちなつ)

- ・昭和50年生まれ 大阪府大阪市出身
- ・2005年に脱サラし大阪から北海道へ移住し農業研修を経て2009年、美幌町で新規就農
- ・大阪時代からの友人・川野美香さんとともに・レタス・ブロッコリー・グリーンアスパラ・塩トマトなどの施設栽培を含め約8ha耕作
- ・趣味は、読書と美術館めぐりと37歳からはじめたピアノ
- ・平成27年度新規就農優良農業経営者優秀賞 受賞

はじめまして。四月から「essay」を担当させて頂くことになりました荒木千夏です。

私は現在、オホーツクエリアにある美幌町で野菜農家を営んでいます。

日々考えることや感じたこと経験してきたことなどを自分らしく文章にしていけたらと思います。

● 転職のきっかけ

今から十一年前までは、大阪でシステム開発の仕事をしていました。

全く業種の違う仕事に転職すると「なにがあったの?」と必ず聞かれます。

システム開発の仕事は、やり甲斐がありそれまで

迷いもなかったただひたすら技術的に向上したいという気持ちでやっていたのですが、三〇歳を目前にある不安がありました。

「歳をとっても、このままの調子で続けていける仕事なんだろうか?」

将来、結婚してもしなくても、仕事は一生続けていくものと考えていたこともあり、定年までこの仕事をしている姿が想像できませんでした。

新しい技術を次々と覚えていく必要がないような仕事を探そうか、はたまた起業して自分が事業主になるのもいいかななどと考えるようになりました。

そんなとき、仕事で長期休暇が取れそうだったので友人と一緒に北海道旅行に行く計画をたてました。

約一カ月の道内旅行ではあちこち回る事ができ、大阪では考えられない広大な自然に触れ、素晴らしい思い出ができました。

旅先から戻り、またいつも通りの日常生活がはじまり、北海道旅行がまるで夢

だったかのような感覚になった頃、心にほっかりと穴が空いたようなどこか満たされない気持ちになり、次第に北海道で生活したいと思うようになりました。

北海道への移住を考え、転職活動をはじめたとき、どうせならと今までは全く違う仕事を探すうちに「農業」に辿り着きました。

● 農業を職業として選択

大阪で産まれ育ち、それまでの環境の中で実際に農業を経験することはありませんでした。

知らなかったからこそ農業という職業に興味を沸いたのかもしれないです。

農業に興味を沸いたときに一番ワクワクしたことが、消費者にどういった形で農作物を提供できるかというところでした。

直売所・ネットなどを通して直接販売という形もある。収穫した野菜を加工したり、飲食店を経営し調理して提供することも可能性としてはある。

あれもこれもしたいと夢はつきることなく広がっていきました。

では、仕事として農業をやっていくためには。それを実現するためにはどうすればいいのか？という疑問に対する答えを見つけるにはかなり苦労しました。

試験に合格すればいいとかそういうことではない。文章にすれば簡単ですが、農作物を生産するために必要な農地を得る、このことが大変で、得るためには、どこで？だから？いくらで？どうやって？とたくさん疑問が出てくる。



レタスの発芽

どうしたらなるのかが、これほど明確でない職業はそうそうないと思います。

● 昔取った杵柄

前職がコンピューター関連のお仕事だったこともあり、農業で使う販売管理のシステムはシステムといえるほど大したものではないが自作のものを使っている。毎年何らかの変更や修正箇所があるので一年に一度はメンテナンスを行うが、これがとても辛い。

ソースコードを見ているとまず眠たくなり、気分転換に珈琲を入れて飲んでみる。それでもパツとしないからチョコレートを頬張ってみる。

お腹が満たされたから少し横になって昼寝でもするかという最悪の流れになり、全く進まない。

農業のことで考え事をしていてもここまで酷くはない。昔取った杵柄はどこにいったのだろう。

● 北海道に馴染んだ結果

大阪ではあちこちに階段がありエスカレーターがあればラッキーとばかりに飛び乗りますが、私が住んでいる町ではまず滅多に階段がないからもちろんエスカレーターもない。

久しぶりに帰阪した際、階段の多さに辟易するしエスカレーターに乗るのにもタイミングを合わせられずに一人もたついでしまう。

それから広告の多さにも改めて気付かされた。駅のホーム、電車の中、ビルの屋上とありとあらゆるところに広告があり十一年前にはそれも当たり前前の景色だったのに、今となっては全てが珍しく感心してマジマジと見てしまう。結果、あまりの情報量の多さに目が回る。

それから大阪の路地裏。これが一時期マイブームになり、帰阪するたびに暇を見つけては「ちょっと、路地裏散策に行ってください」と家族に声をかけ、よく

路地裏の散策に出かけた。隣接する家の隙間のなさに改めて驚き一人で「へー、5cmもないーっというかひつついてる！」と路地裏の芸術を堪能し、帰って母に話すとそこには温度差があり「変わってる」と一蹴された。恐らく本当に私は変わったんだとその時思いました。北海道での距離感が体に馴染み、その感覚で大阪に帰ると全てに新鮮さや発見があるのだと思う。

● 仕事と趣味

これから雪解けが進み気温も上がり一面真っ白だった景色も模様替えされて、緑がちらほらと見えるようになる。

冬の間、かなりゆったりとした時間を過ごし、春が来る頃には趣味の時間やらは一気に吹き飛んでいき、気がつくとなんかしさの中にいる。

毎年のことですが、この日を境に、とかではなく本当にいつの間にか忙しい。一日が仕事だけで終わるのがつまらなく

思うようになり、何か趣味を持ちたいと数年前から思い始め、四年前に大阪で暮らしていた父が病気で亡くなったことをきっかけにピアノを習うようになりました。

父を亡くした悲しみから抜け出すことができません、かなり落ち込んだのですが、それも言ってもらえないのが事業主。

仕事は待つてくれないので、このままでは駄目だと思い今まで挑戦してみたかったことをやってみたら自分自身、何か変わるかもと思い習い始めました。

あれから四年経ち、まだ続いているピアノ。なかなかこれが楽しい。もっと早くから習っておけばよかった。

● 一年に一回のやりとり

以前から一度行ってみたかった場所があり、二〇一三年に初めて訪れることができた場所、四国の直島。

直島、犬島、豊島と瀬戸内海に浮かぶこの島々はアートの島となっていて、数

年に一度瀬戸内国際芸術祭が開催され国内外からたくさんの方が訪れるという言わば現代アートの祭典が開催される島々です。

島内に点在する美術作品を鑑賞し、船の時間を気にしながら島内を歩きまたは自転車で移動するというなかなかハードな内容。

限られた時間の中でできるだけ多くの作品を鑑賞して周りたい。しかも移動の時間はできるだけ抑えて鑑賞時間を確保したいという心理から自転車は基本、たちぎ。

私は友人とともに犬島↓直島↓豊島というルートで直島で一泊する計画を立ていざ犬島に上陸。

想像以上の作品の数々に出会い感動と衝撃の嵐の中、まだまだ犬島で作品を鑑賞していたいという想いを抑え、後ろ髪を引かれながらも船に乗り、次なる島、直島へ。

直島で予約していた宿泊施設がドミト

リータイプ（相部屋）だったため私たち以外にも二名の女性の方が宿泊していた。部屋は狭く二段ベッドが二つ用意されているだけの簡単なものだった。

それでも、同じ目的地で島入りしている者同士が同じ部屋にいれば、どちらからともなく喋りだし、すぐに打ち解けあった。彼女達は私達とは逆の豊島↓直島↓犬島というルートで島入りしてきた。そして、直島で会った。

お互いに豊島と犬島の情報交換をし、鑑賞してきた作品の感想を語り合い、限られた時間の中で互いに素晴らしい時間を過ごすことができた。

それぞれの出発の朝、私は偶然持って

いた名刺を彼女達に渡しサヨナラをした。あれから毎年、直島で出会った彼女達のうちの一人と年賀状のやり取りをしている。



直島

内容は、近況報告をしてから前年に周った美術館や鑑賞した作品の報告を互いにしている。同じ趣味を持つたもの同士が瀬戸内海に浮かぶあの島で偶然出会いそれから一年に一回のやりとりが続いている。これからもずっと大切にしていききたいと毎年思っ。